

「先生になりたかった。」だから、文教を選んだ。

と、書くと、格好いい感じがするが、実際はかなり苦勞した。

まず、合格できなかった。教育学部、人間科学部、文学部と当時越谷にあった学部は全て受験したが、現役、一浪、ことごとく弾かれた・・・。

そして、運命の二浪目・・・。「教員免許がとればいい」だから、中文を受験した。なんとか吉報が届き、無事に文教に入ることができた。

入学してからは未知の分野との遭遇。中国の深さと、中国の哲学、文学のすばらしさに気が付くのはもう少し後の話。水澤先生、牛島先生をはじめとしたすばらしき中文の先生方に出会えたのは幸運以外のなにものでもない。

3年生に無事進級し、いざゼミ選び。このとき選んだのは沼口ゼミ。先輩からも紹介されたこともあるが、入学時の中文歓迎コンパで、最初に会話した先生が沼口先生でもあったので、これも何かの縁だろうと思って選んだのも理由の一つである。

ゼミと言えば、合宿。清里の学生寮での一泊二日。今は綺麗になったというが、当時はけっこう年季が入っていたように思う。一日学んで、夜の打ち上げ。その時、みんなで飲んだお酒の味は格別だった。

4年生になり、教育実習。「中学より高校だよな。」と軽い気持ちで高校の実習を選択。確かに今の職場と比較すれば負担は軽かったように思う。

なので、高校の採用試験を受けるが失敗。高校より中学のほうが講師の枠はあったので、進路変更。中学の講師となって挽回を図る。

おりしも、就職氷河期。採用倍率が上がり始めたころであった。2年目も失敗し、講師の生活も3年目に突入。そんな折、母が病に倒れる。

「母のためにも教員になる！」という気持ちもあり、無事に採用試験を突破したが、母はそのまま鬼籍に入ってしまった。採用通知を見せることができたのが最後の親孝行だったかもしれない。

無事に教諭となり、某人生ゲームのように、山あり谷ありを実感しながら教員生活を続け、気が付けば、講師も含めて30年の月日が経った。

様々な学校を渡り歩いたが、そのたびに文教出身の方とともに教鞭をとることができた。在学中の話で盛り上がることも多かった。中には校長になられた方もいる。

越谷キャンパスも自分がいたころとは大きく様変わりしたと思う。今度娘を連れ、出津橋を越え、行ってみようと思う。